Community 4 Children

地域は子どものために、子どもは地域のために

Children 4 Community

一般社団法人コミュニティ・４・チルドレン
2019 年度事業報告・決算書
(2019 年 6 月 1 日～2020 年 5 月 31 日)
2020 年度事業計画・予算書
(2020 年 6 月 1 日～2021 年 5 月 31 日)

連絡先：一般社団法人コミュニティ・４・チルドレン
〒545-0021　大阪市阿倍野区阪南町 1 丁目 45 番 1－302 号
電話 06－6622－5645　　/Fax　06－6621－7139
E-mail　community_4_children@yahoo.co.jp

はじめに

一般社団法人　コミュニティ・４・チルドレン（以下、C4C)は、皆様の温かいご支援によって 2019 年度の活動を実施することができましたので報告をいたします。

2020 年に入り、世界的な新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて各国各地域の事業も影響を受けました。フィリピンはチャリティ・ランや各プログラムが中止に、タイではコーディネーターが州境を越えることが禁止され長い期間村に入れませんでした。宮城は全国一斉の緊急事態宣言の影響からほぼ活動停止状態でした。世界中がそうであるように、現在も現地団体は活動の自粛や限定化が続いています。

新型コロナウイルス感染症は、東南アジア各国においては 1 月頃から海外からの入国者に感染者が確認されはじめ、急速な広がりに事態は深刻化しました。各国政府は、3 月頃から外出や集会を禁止し、経済活動も停止、学校も一斉休校にしました。日本と違い自粛要請ではなく、禁止命令です。外出禁止時間の外出や、県境を越えた移動は警察や軍による取り締まりを受けます。そのため国内外の人やモノの動きが止まり、その影響は、特に国民の経済面と子どもの教育に及ぶことになりました。C4C では、各国政府の異なる対応に従い、限定された現地団体の活動を後方支援しながら、事業対象地域の情報収集を行っています。

対象国感染者数(2020 年 7 月 7 日現在：https://www.worldometers.info/coronavirus)

国　名	感染者数	死者数	死者数/人口百万
カンボジア	141	0	－
タ　イ	3,195	58	0.8
フィリピン	46,333	1,303	12
日　本	19,775	977	8

7 月 7 日時点の事業対象国の新型コロナウイルスの感染状況は、表のようになります。西欧の国々と比べ、東南アジアでの新型コロナウイルス感染者数は桁違いに少ない状況です。

特にカンボジアでは死者が出ていません。また感染者もすべて海外から入国してすぐに陽性が確認された外国人、もしくはアメリカから帰国したカンボジア人でした。

一方、フィリピンでは海外からの帰国者が持ち込んだウイルスの拡散が原因で、多くの感染者が出て、首都マニラを中心に今もその数は増え続けています。

C4C では、新型コロナウイルス感染症の終息を願いながら、現地スタッフとオンラインで情報共有をしたり、現状を踏まえた何らかのアクションについて協議を続けています。

皆様には、今後も C4C だよりやホームページ等を通じて、現地情報をお伝えしてまいります。皆様からも活動のアイデアやご意見をいただければ幸いです。

～ 目　　次 ～

・ はじめに　－ i

・ 2019 年度事業報告書　－1

1．NGO 支援事業　－1

1－1．海外支援事業　－1

A．フィリピン国 JPCom-CARES 支援事業　－1

B．タイ国ノーンメック村コミュニティ支援事業　－10

C．海外プロジェクト助成事業　－18

1－2．国内支援事業「宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業」　－20

2．文化交流活動支援事業　－25

2－1．スタディツアー　－25

2－2．チャリティラン応援事業（フィリピン・しょうがい児・者自立生活支援事業）　－26

3．視察・研修・ワークショップなど　－27

3－1．研修事業　－27

3－2．国内 IDoCafé 事業　－27

4．パートナーシップ推進事業　－28

5．情報提供事業　－28

6．組織運営　－29

・ 2019 年度貸借対照表　－30

・ 2019 年度財産目録　－30

・ 2019 年度決算報告書 （損益計算書）　－31

・ 2020 年度事業計画書　－34

・ 2020 年度事業予算書　－38

2019年度コミュニティ・４・チルドレン（C4C）事業報告書
Community 4 Children
2019年6月1日～2020年5月31日

1．NGO支援事業

1－1．海外支援事業

フィリピン国JPCom-CARESとタイ国ノーンメック村と連携し、運営・活動を支援してきました。またカンボジアのNGO/Khmer Community Developmentと協働で、ベトナム国境のカンボジア農村の子ども会活動および有機農業推進活動の支援も継続しています。

A.フィリピンJPCom-CARES(フィリピン国バギオ市、ベンゲット州カバヤン町)支援事業

JPCom-CARES(ジェイピーコム　ケアーズ)は、必要な公共サービスや社会資源の乏しい山岳部バギオ市、ハッピー・ハロー村(バギオ市内)、カバヤン町を拠点に、しょうがいのある子どもや青年層が地域で自立し尊厳のある暮らしを営める地域づくりに取り組んでいます。

新型コロナウイルス感染症（＊以下、コロナ）の影響について、フィリピンも東南アジアの国々と同様３月頃から急激に感染者が増えたため、マニラ首都圏のロックダウン、ルソン島全島のコミュニティ隔離など、行政機関はかなり強制的な対策を取ってきました。指示に従わない者には拘束などの強制的措置を実行することもあり、人とモノの流れを止めることに尽力してきました。

多くの海外出稼ぎ者を抱えるフィリピンは、海外からの送金に経済的に頼っています。出稼ぎ先である西欧や中東諸国のコロナの爆発的拡大の影響もあり、仕事がなくなっても多くの在外フィリピン人は帰国することができません。国内における経済的打撃は相当のものと考えられます。このように海外からの人の流入も止められ、国内移動も禁止されているにも関わらず、感染者数は増え続けています。

事業対象地であるバギオ市とその周辺地域は、コミュニティ隔離を徹底し、マニラ首都圏からの人の移動を制限しています。そのため現地団体のスタッフは市内での移動は可能ですが、バギオ市外のカバヤン町などに行くことができません。また、バギオ市内の療育・リハビリテーションセンターにしょうがいのある子どもや保護者が来ることは、感染予防上危険であるため、センターは３月から閉所したままです。

しょうがいのある子どもが療育・リハビリテーションを中断することは、将来の自立生活に大きく影響します。家庭でも療育が続けられるように、様々な通信手段を使って、スタッフが保護者などにその方法を伝えて、継続できるよう配慮しています。

◆2019年度の事業対象者数(人)：2019年6月～2020年5月の期間、下記の人数を対象に事業を行いました。

バギオ市/ハッピー・ハロー村	カバヤン町	計
94	43	137

1.リハビリテーション&保健プログラム

（1）リハビリテーションセンターSTAC5での理学療法、作業療法、教育支援

バギオ市にあるリハビリテーションセンター『STAC5：Stimulation & Therapeutic Activity Center 5： スタックファイブ（*以下 STAC5)』では、あらゆるしょうがいを持つ子ども・青年を対象に、一人ひとりに必要な理学療法、作業療法および特別支援教育をアセスメントしサポートを行っています。月～金曜日、8 時～17 時まで開所し、一人につき 1 回約 60～90 分のリハビリテーションを週に 2 回提供しています。

6～10 月の雨季の時期は、気温変動による体調不良、天候悪化による移動困難といった理由から STAC5 への来所が難しい子どもたちも多いため、普段から保護者に対して療育方法を伝え、各家庭で実践できるように努めました。

コロナによるコミュニティ隔離が始まった 3 月中旬から、STAC5 を閉所せざるを得ず、療育支援を実施することができませんでした。この間、主に SNS・メール・電話を通じて、保護者とコミュニケーションを取り合い、各家庭での療育をサポートしました。動画や写真などを活用し、エクササイズやマッサージのポイント、学習教材などを共有しアドバイスを行いました。これまで、STAC5 と各家庭での療育支援の連携に課題がありましたが、保護者からは、「療育方法について理解を深めることができた」、「子どもについて様々なことに気づくことができた」といった声が聞かれ、この機会が家庭でのリハビリテーションの促進に繋がりました。

◆リハビリテーション利用登録者数（人）

期間	理学療法	作業療法	特別支援教育	計
2019 年 6 月～8 月	21	16	11	48
2019 年 9 月～11 月	22	18	16	56
2019 年 12 月～2020 年 2 月	21	19	12	52
2020 年 3 月～5 月	24	19	14	57

◆リハビリテーションサービス提供数（回）

※3 月中旬～5 月、STAC5 閉室のためサービス提供は実施できませんでした。

理学療法	作業療法	特別支援教育	計
878	844	624	2,346

（2）医療サービスや医療機関の紹介・照会

STAC5 で適切な療育支援を提供するために専門医による診断が必要な子どもたちや、医療ニーズがある子どもたちを連携する専門医・専門医療機関へと繋ぎました。

時期	人数	連携機関	診断内容
6～8 月	6 人	PMHA (Philippines Mental	小児科医と心理士による問診、ソーシャルスキルや認知機能などの発育評価を受けました。一人ひとりの特

		Health Association：フィリピン精神保健協会）	性に応じた特別支援教育やリハビリテーション（理学療法や言語療法など）について助言をいただきました。
11 月	3 人	歯科クリニック	虫歯が進行した臼歯の抜歯を行いました。医師より抗生剤の処方箋が出されましたが、保護者から経済的な理由により無償提供の相談がありました。（後日 JPCom-CARES より提供）
12～2 月	5 人	バギオ総合病院 ノートルダム病院	補装具を合わせるため足の採寸を行いました。定期的な専門医による診断と脳波の検査を行いました。

（3）医薬品の支給・医療費等の一部支援

子どもたちの発育や健康の促進に必要な医薬品の提供、医療費のサポートを行いました。

11 月 7 日	1 人	臼歯を抜歯した子どもに炎症を抑える抗生剤の処方箋が出ましたが、経済的に購入が困難なため、1 週間分の抗生剤の提供を行いました。
5 月 27～29 日	10 人	てんかんや発作を抑える薬は薬価が高く、経済的に購入が困難な家庭の子どもたち 10 人を対象に、薬代 4,000 ペソを支給しました。
	24 人	コロナが広がる中、基礎疾患を持つ子どもたちなど 24 人を対象に、免疫力を高めることを目的にビタミン剤の購入費として 1,000 ペソを支給しました。

（4）保健プログラム

◆健康フェア

※STAC5 記念行事として実施しました。（P.9 を参照）

◆温水療法

理学療法を受ける子どもたちを対象に、温水プールでの温水療法を 4 月に予定していましたが、コロナの影響により中止となりました。

（5）車椅子の提供

国内のリハビリテーション団体より中古の子ども用車椅子を寄贈いただきました。そこで 10 月 26 日（土）に、座位を保つことができる子ども 8 人に提供しました。車椅子は自宅内外での移動を可能にし、保護者の身体的負担を軽減することができます。車椅子技術者からは、車椅子のメンテナンス方法や安全な使用方法について説明をしていただきました。

2.教育支援

（1）奨学金の支給

経済的に厳しい家庭の小学生から高校生までの子どもたちに奨学金（年額5,000～8,000ペソ/約10,000円～16,000 円）を支給しています。

奨学生や保護者から毎月ヒアリングを実施するとともに、定期的に学校訪問も行い、学習状況や学校生

活の様子について情報共有を行いました。「学校で清掃活動を行ってから家の掃除を手伝うようになった」、「クラスメイトと交流できるようになり、母親のサポートが必要なくなってきた」、「食堂での注文や支払いの方法も学び、毎日少しずつ節約し貯金も始めた」など、子どもたちの変化や成長の様子を聞くことができました。担任の先生方も、子どもたちが持っている力や自己肯定感、自尊心といったものを育みながら関わっていることを伝えてくださいました。

コロナによるコミュニティ隔離が開始された３月中旬からは休校となり、子どもたちは自宅学習を行ってきました。「集中力を保つことが難しい」、「ゲーム・テレビ・携帯の使用時間が長くなっている」、「生活が昼夜逆転している日もある」、「食欲コントロールが難しく過食気味になっている」など、生活リズムを崩しやすい子どもたちもいました。保護者と連絡を取り合い、学習支援のアドバイス、教材プリントの準備・提供などを通じて、自宅学習のサポートを行いました。

◆支給対象者人数

地域	小学生	高校生	大学生
バギオ市	6	4	0
カバヤン町	2	16	0
合計	8	20	0

（２）学用品の支給

子どもたちの継続した学びをサポートし、家族の経済的な負担を軽減することを目的に、学校で必要な基本的な学用品の支給を行っています。子どもたちには教育や学校生活の大切さを伝える機会となり、就学中の兄弟姉妹が多い家庭には大きなサポートとなっています。

しかしながら 5 月に支給を予定していましたが、コロナの影響により年度内に実施することができませんでした。

（３）奨学生の生計向上支援（仔豚の貸与＠カバヤン町）

自身の教育費や将来の進学への備え、家計をサポートするため、奨学生を対象に仔豚の貸与を行っています。JPCom-CARES の養豚場で生まれた仔豚を 1 人につき 2 頭ずつ、1 頭 3,500 ペソで貸し出し、得た収入から仔豚代を返済する仕組みです。農業や養豚、養鶏などの第一次産業が主産業であるカバヤン町において、将来、自身の生計の可能性の一つとして、養豚の技術や知識を習得することも目的としています。今年度は、生まれた仔豚が病気や虚弱であったため、貸与することができませんでした。

３.自立生活プログラム

（１）プログラムの実施

青年へと成長している子どもたちが、将来、地域の中で、自身でまたは家族や地域の人とともに自立した生活ができるように、ソーシャルスキル、生活スキル、生計スキルなどの習得を目指し、以下のプログラムを実施しました。

バギオ市では、年齢層やしょうがい特性が多様な青年たちが、毎週 1 回集い訓練を受けました。スタッフの声掛けや誘導、デモンストレーションなどは必要ですが、自身でできる部分も増えてきました。言葉での意思疎通が難しい場合も、ジェスチャーなどを使って自己表現ができるようになってきました。

カバヤン町では、軽度のしょうがいがある中高生世代が毎月 1 回集いました。青年たちによる活動の企画立案・実施の機会を増やし主体性を育みました。助け合い・教え合いながら取り組む姿も見られ、チーム力も高まってきています。

コロナによるコミュニティ隔離が始まった 3 月中旬から、プログラムを実施することができませんでしたが、各家庭で実践してもらいました。朝・昼・夕食の調理、掃除・洗濯の実施、自宅での野菜栽培など、これまでプログラムを通じて学んできたことを自身で実践する機会となりました。カバヤン町では、学んだ手工芸技術を使った商品の制作・販売、軽食の調理・配達・販売など、それぞれのスキルを活かして生計活動を実施した青年も何名かいました。

地域	対象者数	実施日	プログラム内容
バギオ市	【グループ 2】 毎週火曜日 9 時-12 時 8 人	6/4, 11, 18, 25 7/2, 9, 16, 30 8/6, 20, 27 9/3, 10, 17, 24 10/1, 8, 15, 22 11/5, 12, 19, 26 12/3, 10 1/7, 14, 21, 28 2/4, 11, 18, 25 3/3, 10 （計：35 回）	・ソーシャルスキル （挨拶、コミュニケーション、非言語コミュニケーション、アイコンタクト、スキンシップ、表情など） ・マナー （テーブルマナー、公共の場でのマナーなど） ・身だしなみ （手洗い、口腔・足・爪・耳・脇・髪・鼻・顔など身体のケア、お風呂の入り方、更衣の方法、トイレの使い方など） ・家事技術 （掃除、洗濯、ゴミの分別、皿洗い、テーブルセッティングと片付けなど） ・調理技術 （食品の準備、衛生管理、調理器具の使い方、ガスコンロの使い方、多様な調理方法の実践、片付けなど） ・健康管理 （体力づくり、エクササイズなど） ・アート＆創作活動 （ネームタグ用ビーズネックストラップづくり、ビーズアクセサリー制作、ペイント、プラスチックボトルの貯金箱づくり、ポートフォリオ制作、プラスチック袋を使った枕づくり、ペーパーランタン制作、クリスマスカード制作、刺繍、裁縫など）
	【グループ 1】 毎週木曜日 9 時-16 時 9 人	6/6, 20, 27 7/4, 11, 18, 25 8/8, 15, 22 9/5, 12, 19, 26 10/3, 10, 17, 24 11/7, 14, 21, 28 12/5, 12 1/9, 16, 23, 30 2/6, 13, 20, 27 3/5, 12 （計：34 回）	
カバヤン町	13 人	6/22, 7/27, 8/24, 9/21, 10/19, 11/16,	・畑作業、庭仕事 ・仔豚小屋の清掃

		1/18,2/8 (計:8 回実施) ＊アクセスが困難な山岳部で広範囲に暮らしているため、毎月 1 回実施。	・マクラメ織ハンギングプランターづくり ・昼食調理 （メニューの決定、買い物リストの作成、予算計画、買い物、金銭管理、調理、後片付け） ・行事の企画立案

※カバヤン町では、夏期休暇期間を利用した 1 週間の合宿型の研修を 4 月・5 月に予定していましたが、コロナの影響により実施することができませんでした。

（2）モニタリング

ハッピー・ハロー村では、自立生活プログラムに参加した 20 代以上の青年が、それぞれの興味・関心に沿った生計プロジェクトをスタートさせています。そこで毎月家庭を訪問し、モニタリングとサポートを行いました。

例えば、昨年からきのこ栽培に取り組んでいる Daisy さんは、今年度も計 200 袋の菌床を購入し、自宅近くに小さな土地を借り、白菜やトマト、きゅうりなどの野菜栽培を再開しました。年間通じて約 5,000 ペソ（約 10,000 円）の売り上げがありました。Daisy さんは軽度の学習障害を持っているため、同居している姉が日常生活や栽培のサポートを行ってきましたが、市内で働くことになったためサポートができなくなりました。Daisy さん本人も介護が必要となった叔母の身の周りの世話をするため、自宅を離れざるを得なくなり、現在きのこ栽培は中止しています。

また、身体にしょうがいをもつ Aprila さんは、年間通じて 31 頭の豚肉を販売し、約 80,000 ペソ（約 160,000 円）の収入を得ることができました。事前の予約注文を受け付け、食品ロスが出ないよう工夫しました。自宅にて雑貨店も経営し、近隣住民のニーズに合わせた商品の仕入れを行い、売り上げも順調でした。

4.保護者のエンパワメント

（1）生計向上プロジェクトのモニタリング・ヒアリング

昨年、きのこ栽培研修に参加したバギオ市・カバヤン町の保護者 8 人に、その後の栽培・収穫・販売状況のヒアリングを行いました。

研修後もきのこ栽培を継続していましたが、実際に自身で栽培を始めてみると、思っていた以上に菌床のメンテンナンスに技術が必要であると感じた保護者が多くいました。適切な菌床の管理と栽培ができていなかったため、半年で 1,000 ペソ（約 2,000 円）の収益しか出ず、安定した収穫・収入が得られた保護者はいませんでした。給与所得や養豚、野菜栽培などから主収入を得ている保護者もいますが、中には季節労働で収入が安定しない保護者もいます。今後、専門家による定期的な技術のフォローアップやアドバイスなど研修後のサポート方法を考えていきます。

（2）ワークショップ・研修の実施

◆しょうがい特性と対応方法についての研修

日程：11 月 22 日

内容：保護者 27 人を対象に、しょうがい特性と対応方法について研修を行い、参加者間で知識や経験の共有を行いました。社会福祉開発局の担当者より、しょうがい児・者の権利や福祉的なサポートについて

も説明をしていただきました。
◆身体しょうがい児理解、早期発見と予防・対処のためのワークショップ
日程：【第①グループ】1 月 24 日、【第②グループ】2 月 19 日
参加者：【第①グループ】子ども 7 人、保護者 8 人、【第②グループ】子ども 7 人、保護者 7 人
内容：脳性麻痺のある子どもの筋肉や関節の拘縮、骨の変形を予防するためには、日常的に継続して理学療法やエクササイズを行うことが大切です。そのため、理学療法士より家庭でできるプログラムの共有と実践を行いました。関節や筋肉の拘縮がすすんでいる子どもたちもおり、骨を折ってしまわないか、筋肉を傷めてしまわないかと保護者からは不安な声も聞かれましたが、正しい情報や知識を伝えながら実践することができました。3 月に、参加した保護者に実施状況や効果についてヒアリングを行い、6 人の子どもたちに拘縮の軽減が確認されました。

◆ダウン症セミナー
日程：2 月 18 日
内容：保護者 7 人を対象に、ダウン症児の発育やしょうがい特性の理解、日常生活のニーズや対応について、専門医や小児科医によるセミナーを開催しました。質疑応答の時間では、多くの保護者から子どもとのかかわり方について相談があり、医師からの具体的なアドバイスと保護者同士の経験共有が活発になされました。

◆ストレスマネジメントセミナー
3 月に予定していましたが、コロナの影響により中止となりました。

5. 権利擁護・コミュニティ啓発活動
アドボカシー活動として、以下の行事を実施しました。
◆青年リーダーのためのリーダーシップ研修会
日程：6 月 18 日～19 日
内容:ラ･トリニダッド町の地域活動を担う青年組織メンバーおよび社会福祉を学ぶ学生 40 人を対象に、青年層とのパートナーシップの構築とリーダーシップの育成を目的に研修を行いました。特に、しょうがい児･青年たちとともに行う地域活動についてセミナーを開催しました。プレゼンテーションでは、自信をもってアイデアを発表している姿が見られ、研修を通して多数の知識を得たようでした。

◆しょうがい者に関連する法や政策に関する研修（マグナカルタ研修）
日程：7 月 22 日
内容：介護等を学ぶ職業訓練校の生徒 51 人、教員 6 人を対象に、しょうがい児・者の権利やしょうがい理解を深めることを目的に、マグナカルタの紹介を行いました。いじめの予防だけでなく、しょうがい児･者との交流を促進することが期待されます。生徒たちも熱心に聞き、教員からも理解が深まったとのフィードバックをいただきました。

◆エコセラピー＆清掃活動
日程：9 月 25 日
内容：自然に親しむこと、地域に貢献することを目的に、子ども・青年 16 人、保護者 18 人が、バギオ市内の公園の環境美化・整備活動を行い、地域の警察学校の学生の方々も一緒に参加してくださいました。子どもたちは、仲間と協力をしながら草取りや植栽に取り組みました。

◆ファミリーサポートグループ：自閉症児への理解とサポートの方法
日程：10 月 19 日
内容：フィリピン精神保健協会が自閉症児に関わる保護者や介護士を対象としたファミリーサポートグループを開催し、保護者 5 人が参加しました。特徴的な行動など自閉症に対する理解を深め、家庭等でのサポートの方法について学びました。参加者間での知識や経験の共有を行い、関わり方やコミュニケーションの取り方に悩む保護者にとっても、新しい知識やアイデアを得られる機会となりました。

◆身体しょうがいや発達しょうがいへの理解、早期発見と療育セミナー
日程：11 月 26 日
内容：社会福祉開発局、地域の児童福祉委員、保健ワーカー、しょうがい福祉担当者、デイケアセンターの子どもの保護者など、地域で子ども支援やしょうがい児・者福祉に関わる計 42 人を対象に、身体しょうがいへの理解を深め、早期発見や療育のために必要な支援について研修しました。

◆大学訪問ツアー
学生企画による学内ツアーの催しを 3 月に予定していましたが、コロナの影響により中止となりました。

6. ネットワークづくり・社会資源の活用

（1）ネットワークづくり

地域パートナーや各関係者・機関とのネットワーク構築のため、下記の行事を実施しました。
◆全国しょうがい予防リハビリテーション月間
日程：7 月 23 日
参加者：子ども・青年：40 人、ご家族：54 人、連携団体・関係者：62 人　（全体 156 人）
内容：食事や栄養、運動など健康的なライフスタイルの方法を紹介し、子どもや保護者・家族の健康の維持・改善につながるプログラムを実施しました。子どもたちには無料でインフルエンザワクチンの接種を実施しました。マッサージセラピー、ヘアカットやネイルケアなどのサービスも行い、保護者たちも束の間のくつろぎの時間を楽しんでいました。自覚症状は無いものの血圧が高い保護者に対しては、医師より血圧コントロールや予防方法などの助言がありました。

◆STAC5 の 22 周年記念行事「保健フェア」

日程：10 月 9 日

参加者：子ども・青年：43 人、ご家族：50 人、

連携団体・関係者：50 人（全体 143 人）

内容：リハビリテーションセンターSTAC5 運営 22 周年を記念し、子どもや家族の健康を願い、健康診断やリラクゼーションの機会を提供すること、子どもと家族、関係者の連携強化を図ることを目的に開催しました。体調に不安があっても、経済的な面から早期に医療機関にかかることができない家庭もあります。保健フェアでは、血圧や血糖値の測定、視力・歯科・耳の健診、ビタミン剤の提供などを行い、子どもや保護者自身の体調に関する相談やアドバイスも行いました。

◆クリスマス会＆年末の集い@バギオ市

日程：12 月 18 日

参加者：子ども・青年：73 人、ご家族：136 人、連携団体・関係者：54 人（全体 263 人）

内容：多くの参加者が集まり、協力団体からも多数のクリスマスプレゼントが配られ、子どもだけでなく保護者・家族にも楽しい時間となりました。子どもたちも練習してきたダンスや歌を大勢の前で発表し、力を発揮する機会となりました。

（2）ファンドレイジング活動

自主財源の獲得のため、下記の取り組みを実施しました。

◆チャリティ・ズンバ

日程：11 月 23 日

内容：ズンバは、ラテン音楽に合わせてダンスするエクササイズプログラムです。老若男女問わず幅広い年齢層が参加できるため、自主財源の獲得とネットワークの構築を目的に、今年度の新規事業として企画・実施しました。269 人が参加し、約 85,000 ペソ（約 170,000 円）の寄付金を募ることができました。

◆Run for Amity 2020（友好ラン）

3 月 8 日に、3 回目となるチャリティ・ランの開催を予定していましたが、コロナの影響により中止しました。

◆募金箱の設置

昨年に引き続き、連携する団体、カフェやオフィスなどに協力していただき、52 ヶ所に募金箱の設置を行いました。コロナの影響により、年度内に募金を回収することができず、募金額の集計はできていません。

（３）食糧物資の緊急支援

バギオ市議会議員の支援を受けて、コロナの影響により救援物資が必要な 10 家庭を対象に、米、缶詰、乾麺、お菓子など緊急食糧支援パックの提供・支援のコーディネートを行いました。

【成果と課題】

コロナの影響により、3 月末から 5 月にかけて予定していた活動は中止せざるを得ませんでした。しかし、これまで各家庭での実践に課題があった療育支援や自立生活プログラムなどは、コロナをきっかけに在宅で過ごさざるを得ない時間が増えたことにより、保護者との連携が強化され、日常生活の中での実践を促進することができ、次年度の地域や家庭を拠点とした活動に繋がっていく機会となりました。

コロナ禍の中でも、自ら考え保護者とも協力しながら、生計活動を始めた青年層も出てきました。また、青年層を主体とした活動の企画・実施も始まり、一人ひとりの主体性や持っている力が育まれていくような活動づくりやサポートを続けていきます。

また、今年度は、新たなファンドレイジングの方法として、チャリティ・ズンバを企画・実施しました。募金箱の設置の協力先を増やすなど、引き続き自主財源の獲得に力を入れました。

課題として、昨年度から青年層や保護者の生計向上プロジェクトの一つとしてきのこ栽培に取り組んでいますが、安定した収入に繋がっていないことがあげられます。コロナ感染拡大防止によるコミュニティ隔離措置の開始以降、収入の減少により経済面でより厳しい状況にある家族が増えています。安定した収入に繋がるように、専門家によるアドバイスや定期的な技術研修の実施など、フォローアップを工夫していきたいと考えます。

B. タイ国ノーンメック村コミュニティ支援事業

2019 年度より、タイ国ではノーンメック村のコミュニティ支援事業に専念することになり、子どもを見守るコミュニティ作りに重点を置くことになりました。

農業をやめて子どもを村に置いて出稼ぎに行く村人が多く、祖父母による育児も放任やネグレクトになりがちです。子どもたちは誰かに愛されているという実感が持てず、ドラッグや酒などに耽溺し、親と同様にいつのまにか出稼ぎに行ってしまいます。まず大人たちが、コミュニティの中でしっかりと絆を深め、経済面を含めて自立していかなければ、子どもの見守りはできません。

事業は、有機農業普及と伝統文化の復興を柱に、自然と共存しながら収入向上を図ります。そしてコミュニティ内で大人も子どもも一緒に働ける場を作り、将来、自分たちのコミュニティのために働く若者を育てます。

コロナの影響についてですが、WHO からコロナ対策優等生と言われたタイでは、最初の感染者が出てから、感染予防の様々な措置を交付し、4 月からは休校、移動禁止、夜間外出禁止、生活必需品の販売以外の小売店・ショッピングモールなどの閉鎖、都市のロックダウンを断行しました。その結果、コロナウイルスを封じ込めたかのように見えます。しかしそのため小規模のビジネスを営んでいた人々のほとんどが失業状態となり、経済的に大きな打撃を受けています。

4 月以降、移動禁止命令のため、支援しているノーンメック村へ隣県からスタッフが行くことができなくなり、計画していた研修なども中止・延期になりました。村では、コロナウイルス感染を恐れた人々や、

工場での仕事が時短または休止になった労働者が、田畑で農作業することが増えました。学校に行かない子どもたちは親が田畑へ連れていったり、またはバンコクに出稼ぎしている両親の元へ行ったまま、移動禁止令が出て帰村できなくなった子どもたちもいます。

村内での大きな変化は、これまで農業に目を向けなかった労働者世帯が、家族の自給のため、将来の選択肢の一つとして有機農業に関心を示し始めたことです。コロナによる移動制限のため自宅や田畑で過ごす時間が増えた村人は、ローカルスタッフの元を訪れ、種子をもらうと同時に有機農業の始め方を熱心に聞いていました。

７月以降、移動や外出規制も緩くなり、バンコクでも工場や商店の仕事が始まったため、子どもたちも帰村し、村内ならば他の家を行き来するようになりました。タイのローカルスタッフとボランティアは、状況を見ながら、８月から始まる新学期に向けて、子どもたちの支援を考えているところです。

1. 有機農法の普及

◆子どもとコミュニティのための有機農業実験農場での稲作

＠アランヤー実験農場（近隣に住む住人が無償で田畑を貸してくれています）

参加者：ノーンメック村と周辺村の大人、青少年約 60 人（田植え時）

子どもたちに農文化や農民としての生き方を愛する心を育て、大人たちにとっては、農業投資のコストダウン、食の安全や環境にもやさしい有機農業を推進するためのセンターです。無農薬で稲作を始めて 4 年目になりました。苗づくり、田起こし、田植え、雑草抜き、稲刈り、脱穀まですべての過程を村人たちが無償で行い、化学肥料や農薬を投入しなくても十分収穫できることを多くの人が知るようになりました。2019 年 8 月 11 日には、『結』として行った田植えにはスタディツアーで来た日本人やカンボジア人を含めて、60 人以上の人々が集まってくれました。

ところがその後あまり雨が降らず、ため池も地下水もすべて干上がる深刻な干ばつに見舞われました。そしてすべての稲が枯れてしまい、収穫することができませんでした。村全体を見回しても、収穫が多少でもあったのは 5 世帯だけでした。

通常、収穫後に行う緑肥も土地の乾燥が激しく、土が固くなってしまい植えることができませんでした。5 月になり少し雨が降り始めたので耕すことができるようになり、マメ科植物（コブトリソウ）を植えました。土地の状態を見ながら、土地改良のためにさらに緑肥を追加する予定です。

◆種子ファンドのための種子収集と配布

日時：5 月 1、14、26 日（ルーイ県、マハーサラカーム県、ノーンメック村）

これまで地元の原生種を残していくために、様々なところから種子を収集し、やる気があって種子の保全に賛同し有機農法で増やそうとしてくれる人に配布してきました。

しかし、2019 年の干ばつを受けて、2020 年雨季に植える種籾の貯蓄もなくなったため、これまで築いてきた農業ネットワークでつながった他県の村々を周り、種籾として多種類の原生種を分けてもらい、関心のある村人 13 人に配布しました。

2. コミュニティ文化の継承

◆寺院での行事参加　@ノーンメック村寺院

日時：6 月 7 日、7 月 16 日、9 月 6、12、13、21、28 日、10 月 6、13、27 日　計 10 回

雨安居期の仏日、村人の葬式、仏教行事の際、スタッフが子どもたちを連れて、飲み物を寺に寄進し、行事のお手伝いをしました。伝統文化を継承していくとともに、子どもとコミュニティの活動を広く知ってもらう機会にもなります。

◆年末年始の集まり　@ノーンメック村

日時：12 月 21 日

参加者：ノーンメック村住民大人から青少年まで約 40 人

村落議会議員を中心に多くの村人が集まり、この一年の村での活動を振り返り、次年度の計画を議論し発表する場を持ちました。有機農業実験農場、ごみの不法投棄の問題、牛銀行の運営など協働で行ってきた活動、特に今年の干ばつによる水不足の問題についての対処方法を議論しました。

C4C がノーンメック村と関わり始めた頃は、どうしても私たちやタイ人スタッフが主体で事業が管理され、村人たちは事業の受け手でしたが、今では様々な事業が村人たちの手によって運営・管理されています。そして問題や計画を C4C とシェアしながら協働できるようになりました。

◆コミュニティ青年ボランティア

参加者：子どもと保護者　20～25 人

以前から、週末など学校が休みの日に、青年がボランティアとして日常生活で役にたつ簡単な英語、算数、理科などを小さな子どもたちに楽しく教えていました。現在は場所をローカルスタッフの家に移動し、いつでも誰でも来て絵本を読んだり遊んだりできる場として開放しています。その理由は、スタッフの目が届く方が、保護者が安心して子どもたちを遊びに来させることができるためです。2019 年度からは、料理や染めなどの日常生活に役立つ技術を体験する小セミナーも開催しました。

日時	場所	活動
1 月 5 日、2 月 15、22 日、3 月 7、14 日	ノーンメック村ローカルスタッフの家	・年少の子どもたちが、簡単な英語、算数、理科などを楽しく学ぶ ・村の女性から料理、青年から草木染を学ぶ ・自由に読書、遊びができる

2 月末に始まったコロナ自粛以降、学校も休みになり、子どもたちは家にいなければならず、自由に動くことができないので、村での活動はしばらく休むことになりました。

3. 森林保護・保全、有効利用活動

◆植林　@ノーンメック村公共地

日時：7 月 3、13、20、21 日　苗の運送、　7 月 7 日、8 月 10 日　植林、境界線上に看板設置

参加者：ノーンメック村と周辺村からの大人と青少年、タイ・スタディツアー日本人参加者　合計約 50 人

隣接する土地所有者がキャッサバを植えていた村の公共地を昨年より返還してもらい、村人たちと森

を再生しようと植林しています。多様な苗木をコンケン県とサコンナコン県の苗木センターで手に入れ、2 回に渡って村の公共地に植えました。今年は、看板も設置し村の所有地であることを提示しました。今年は干ばつに悩まされましたが、約 8 割の苗が生き延び育ってきています。

◆植林と自立のための農業モデル村から学ぶ視察・研修
参加者：ノーンメック村住民（有機農業をすでに始めた大人と青年）
　森林保護や有機農業の実践者の経験から学ぶ研修を行っています。森林保護、有機農業、自然の有効利用に熟知した先達たちの実践を視察し、経験交流し、自分たちの村でも応用できるよう考えます。

日時/ 参加者数	場所	活動
7 月 22-23 日 17 人	チャイヤプーム県ブアラウェー郡ワンタケー行政区ターブローン村　“充足たるコミュニティ”センター、ワンウドム村薬草センター	・農業生産物を様々に生産加工して商品化を進めている他村の実践を視察・経験交流 ・森の産物である果物の原生種、商品化できる植物、加工品、家庭林の保護についての学び ・家庭林に植える薬草の種子や苗木を採集して持ち帰り、帰村してから自分たちでも植栽
10 月 21-22 日 18 人	ルーイ県パーカーオ郡パーカーオ行政区コークパクワーン村タイカセート園研修センター、ソムサックパタナー村	・大学生の頃農村ボランティアを経験し、自然農法に感銘を受け 30 年ほど前に移住して農園を営む 8 人のメンバーとの実践経験交流。 ・果物などの原生種、商品化できる植物、加工品、家庭林の保護、自給の考え方などを自然農法実践者から学習 ・子孫のために自然保護を考え、話し合い
2 月 18 日 14 人	ブリラム県サトゥック郡サッケー行政区サッケー村薬草学習センター	・元小学校教師で、今は森林、有機農業農園、薬草園、家畜の飼育などを管理し、堆肥や虫よけなど農業のすべてにおいて自給自足している夫婦を訪問し、視察・経験交流。彼らは早期退職後、伝統治療師の免許を取得し、自分で育てた薬草で薬剤を調合し、求めに応じて治療行為も自宅で実施。

◆水利管理研修
日時：3 月 18-19 日　@チャイヤプーム県ノーンブアデーン郡ナーンデーット行政区ワントータン村研修センター
参加者：ノーンメック村住民 10 人

　今年の干ばつは過去 20 年間で一番激しいものでした。ほとんどの世帯の稲も枯れ、多くの木も倒れてしまいました。この水不足の問題を解決するために、まず水利をうまく管理・運営しているところを視察し、自分たちで学習して、自分たちなりのモデルを作り、他の村人に見せることで、これからの水問題を解決しようとする計画です。

視察した農地は高地の岩場にあるにも関わらず、地下水が枯れることがないそうです。地下水は常に高地から低地に流れ、その水脈の場所さえ知ることができれば、地下水をためることができるとのことで、それを実際に見た多くの村人は驚いていました。地下水がどこにあり、どこに浸み込み、どのように流れるのか、地下水の動きの原理や、毛細管現象を利用した効率のよい貯水の方法を学ぶことで、利用したいときに使えるようにします。

4 月には、この時講師をしてくれた農民をノーンメック村に呼んで、実験農場の敷地内で地下水を調査して貯水モデルを作る予定でしたが、コロナ拡散のため計画を中止しました。

◆青少年によるコミュニティ内植林のための種苗作りと収入向上

参加者：ノーンメック村・ノーンタカイ村の青少年　10 人

村の青年が子どもたちとともに森の中に入り、年長者が年少者に知識や経験を伝え、地元や自然を愛し守る心を育てる活動です。保護者たちも、子どもがゲームばかりせず、有益なことをしているのを見て喜んでいます。

日時	場所	活動
6 月 2、16、30 日、7 月 14、23、28 日	アランヤー有機農業実験農場	青年たちが身近にある森に入って染めの材料となる樹皮や草木などを採集する際、年少の子どもたちは自然の有用性を教えてもらいながらお手伝いをします。そしてみんなで一緒に苗木用ハウスを作り、採集した有用樹木や薬用の根茎類などを植え、黒い袋に入れて苗木ポットを作りました。苗木ポットは子どもたちで分けて、自宅に植えたり、他の村人に売ってお小遣いとしました。
4 月 19 日、5 月 1、18、23 日	ノーンメック村スタッフの家	これまで、森で採集した苗木を実験農場の場を借りて、ハウスを作っていましたが、干ばつの影響で、ため池や井戸が干上がってしまい、苗木を育てるための水源を見つけることが困難になったため、苗木を集落内に移動させました。スタッフの庭に苗木ポットを集め、水道水や井戸水を利用して育てています。また 2 月以降、コロナの影響で、子どもたちが集まることが少なくなりました。

今回のコロナの蔓延は、どんな状況にあっても農業に従事している者たちが生き延びることは都市に住む人ほど困難ではないことを示してくれました。多くの村人が工場などでの仕事を失い、一部の人は村に帰ってきました。そして農村に居ても仕事がないので、農業、それも有機農業を自分たちの家族のために試してみようとする人が増えました。そこで苗木や野菜の種子などを村人の求めに応じて配布・販売しました。

4. 青少年のための職業訓練

出稼ぎに行かなくても、地元コミュニティの中で仕事を循環させることができるように、青少年の就労支援を兼ねた試みとして草木染を推進しています。それに加えて婦人グループを対象にした自然を利用した加工品の商品化も推進することになりました。

青少年も婦人グループも地元コミュニティの繋がりや協力体制作りにおいて重要な役割を果たしてくれています。そのような人々が安心して地域づくりに専念できるように、地域内での暮らしをサポート

します。

◆草木染

日時：11 月 12 日　＠ノーンメック村

参加者：青年 7 人

　これまで村外での研修で学んだことを忘れないうちに、自分たちで試してみました。草木染の工程、藍染めのどろ藍の管理、染めのデザインや発色、マーケティングなどの研修を通じて、参加者の青年たちはそれぞれの好みや特性を知るようになり、ある者は染めに、ある者はマーケティングに、ある者はしぼりデザインに関心を持つようになりました。そして自分自身でもネットで探してより多くの情報を得ようとしています。また材料を与えてくれる森林保護への関心が高まり、植林にも協力してくれるだけでなく、自分の屋敷地内にも植林するようになりました。

　現在、イベントやネットを通じて、一部の草木染 T シャツやスカーフを販売しています。今後、どのような方向に展開すればいいのか、ローカルスタッフや C4C とともに考えていきます。

◆コミュニティ生産物の加工・商品化　＠ノーンメック村

　村の婦人グループは、有機農業の推進や生産物の加工において中心的な役割を担っています。自分たちのコミュニティのために働くということを常に意識して行動をとることができるコア・メンバー(5-6 人)もいます。これまでの村外で受けた色々な研修から、身近な自然や森の産物を利用し、有機農業を行い、家庭菜園や林を育てることが、最大限の利益を得るためには自分たちに一番合ったやり方だと理解し、自分たちで商品化を模索しています。また年配者が持つ自然に関する知識を集め、新しい村の生産物を作ることは、収入を向上させるだけでなく文化の継承にもつながります。

日時	参加人数	活動
10 月 25 日 11 月 19、30 日	ノーンメック村女性 20 人	森林管理や自給自足の農業を視察してきた後、自分たちのコミュニティにも多くの資源があることに気づき、それをより一層の価値あるものにするのは自分たち次第であることが分かりました。そこでまず初めに身近な環境として家の周りにある木や薬草を調べることから始めました。名称、有効性、食物や薬とするための加工方法などを学びながら数えてみると、40 種類以上の有益な植物が見つかりました。 　そこで自然の素材を使って、シャンプー、石鹸、やけどなどの傷に効くオイルなどを作りました。配布したり、相手によっては販売しましたが、なかなか評判がよく、タイ伝統マッサージの学校にも置いてもらえることになりました。
12 月 21、23 日	ノーンメック村女性 8 人	収入向上のための商品開発・生産物加工に関して様々なことを話し合ってきましたが、婦人グループのメンバーは、袋詰め、シャンプー容器、薬効などを書いた紙の添付などが売り上げに影響することを知るようになりました。今回は

1 月 23 日		いろいろなものを持ち寄り、包装について学んで実践しました。 　そして婦人グループの共同の会計として売り上げを管理し、次の加工のための材料などを買う費用をそこから出すことにしました。

5.　青少年ネットワーク形成・交流

参加者：ノーンメック村青年 5 人

　青年たちにとって、村外における研修・交流は、世界を広げ、自分がやりたいことの方向性を示し、自信をつける機会になります。染めなど自然の有効利用や森の管理についての研修に参加した青年たちは、他の地域から参加した青年たちの活動にも関心を持ったようで、自分たちで積極的に質問し、それぞれが何かを得たようでした。そして自分たちの村でも応用してできることを確信しました。

日時	場所	活動
8 月 23-25 日	ムックダハーン県ムアン郡カムアーフアン行政区クラーム・ブン村	換金できる有用な森の植物を学ぶだけでなく、森自体の有効利用としてエコツーリズムについて実践例から学びました。そこでは暮らしを豊かにする家庭林の保護・管理も行っていました。
8 月 29-9 月 1 日	サコンナコン県クットバーク郡クットバーク行政区ブア村インペーン・センター	藍染めの技術を向上させるために、実践者たちから学び、様々な材料、方法などを学び、一緒に実践してみました。
11 月 9-10 日	ルーイ県プールアン郡ルーイワンサイ行政区シーチャルーン村自然農業センター	草木染に使う植物、価値を高める家庭林の保護と管理、絞り染め、色重ね、自然農業の自立の実践を学び、農民たちと交流しました。この村は、「オーガニック観光モデル村」とされている村で、草木染のオーガニックコットンを生産・販売するだけでなく、古代米、郷土料理、美しい自然をテーマにタイ人観光客を誘致しているところです。

6.　牛銀行プロジェクト

　2013 年 6 月から出稼ぎによる若年層の流出を止め、コミュニティの担い手を育てるために、牛を育てて得た利益で、村の青少年の就労支援基金の設立を目指して始めました。村人たちで牛銀行委員会を設立し、牛の売買、飼育者の選択、飼育ルールなどの規約をみんなで相談して決め、2015 年からは、母牛 3 頭ずつを 2 世帯（合計母牛 6 頭）に飼育してもらい、生まれた子牛のうち一頭/世帯を牛銀行に利子として母牛 3 頭とともに返却するシステムを開始し、母牛 3 頭は別の飼育者の元へ預けられ、地域内で循環します。子牛は時期をみて売って現金化し、委員会で相談した結果、2018 年度から経済的に恵まれない村の子どもの奨学金(2000 バーツ：約 6000 円)とすることになりました。

しかしながら干ばつの影響は、牛の飼育にも及び、牧草など牛の食べ物や水を探すのが困難となり、飼育者の方から「今回の乾季の干ばつは乗り越えられそうにない」ので、牛の飼育をやめたいとの申し出があり、牛銀行委員会で相談したところ、一旦牛銀行プロジェクトの牛全部（母牛 6 頭、子牛 2 頭）を行政区長が預かり、飼育者として希望者の中から一人を選抜し、行政区長が持つ広い土地と井戸水を利用させてもらうことになりました。特別な状況下であるため、飼育者一人が母牛 6 頭を飼育し、生まれた最初の 3 頭の子牛は飼育者のもの、後の 3 頭は牛銀行委員会の所有とすることに決まりました。そして子牛を売って得られた利益（3 万バーツ）は、村の子どもの奨学金とすることに合意を得ました。その後、雨季が近づき少し雨が降り始め状況は少し良くなりました。7 月には子牛を売った利益を分配する村の子どもを牛銀行委員会（＝村落議会）で選ぶ予定です。

【成果と課題】

2019 年度よりタイ国への支援は、ノーンメック村のコミュニティ作り事業だけに絞ることにしました。しかしながら、干ばつやコロナの影響で、コミュニティ内外の多くの活動が中止になりました。特に、コロナ感染予防のための自粛によって、人々は長距離移動が困難になり、工場や商業施設での仕事も減り、収入も減りました。子どもたちの学校も閉鎖されました。人々はコロナ拡散予防のため、外出を取りしまる警察を恐れ、長期間の自粛を強いられました。その社会的経済的影響は今後一層明らかになるでしょう。

またこれらの災禍によって再確認したことは、子どもを支援するためには、人々の絆を強化し、経済的な自立を支援し、その中で自信と尊厳を持って生きることができるコミュニティ作りをしなければならないということです。幸いにも、農村を中心に事業を行っているため、対象村とその周辺には農業従事者が多く、急に日々の食べ物に困ることはありません。非常事態において農業の重要性に気づき、コロナの脅威から逃れるため、多くの農民は田畑で様々なものを植え始めました。そしてこれまで働いていた工場での仕事がなくなった村人たちも、有機農業に関心を示し、自分たちのために家庭菜園や植林をするようになりました。

子どもたちに関して言えば、休校と通勤自粛のため、子どもと保護者が一緒に過ごす時間が増えました。これまでバンコクで出稼ぎしていた保護者が子どもを呼び寄せるケース、工場での仕事がなくなったので村で農業を始めようとした保護者が子どもを連れて田畑で働くケースなどがあります。コロナによる影響のいい側面としては、親と子どもの関係が密接になることで改善するとも考えられます。コロナの影響とその対応の評価などは今後行わなければいけないでしょう。

特別な災禍が続いた 2019 年度でしたが、水不足は毎年のように問題となります。これまでも干ばつに対して、ため池や井戸掘りなどで対応してきましたが、それだけでは不十分だったようです。貯水をどうするのか、水不足をどのように乗り切るのかを、もっと深く掘り下げて考えなければいけないかもしれません。

C.海外プロジェクト助成事業

カンボジアのNGOであるKhmer Community Development(以下、KCD)を通じて、ベトナム国境沿いの村々の子ども会活動（ピース・クラブ）と有機農業推進事業を支援しています。また小学校の図書室の整備や本の補充も支援しています。現時点での活動地域は、プレックチュレイを中心にした3行政区8カ村で、これからも拡大していく予定です。

カンボジア農村では就学年齢になっても学校に行けない子どもがまだまだたくさんいます。その主な原因は、家庭の貧困です。化学肥料や農薬に頼る換金作物栽培、毎年農地が冠水する地勢的な特徴、ベトナム人との共住による土地の権利の複雑さなどのため、借金は増え、環境は破壊され、農業収入に頼ることができない農民がいます。農業をあきらめ子ども連れで外国(タイ)へ出稼ぎに行くケースも増えています。そのためKCDでは農村開発事業に加え、生産コストを抑え、環境にも優しく、今後マーケットが期待される有機農業を推進しています。C4C は、2016 年度よりタイで行うカンボジア人スタッフと農民のための有機農業研修事業を支援し、タイで有機農法のノウハウだけでなく、食品加工や市場開発などを学ぶ機会を持ってもらっています。

コロナの影響についてですが、感染者の報告が少ないカンボジアの状況がよいのかといえば、そうとも言えません。カンボジアの経済は、観光業に大きく依存しているため、外国人の入国禁止措置などの政府の対応は遅く、なおかつ緩いものでした。しかし早い時期に隣国であるベトナムとタイが実質上の鎖国措置を取り、人とモノの流通を止めたため、結果的にカンボジア国内でのコロナウイルスの拡散は防ぐことができているかにみえますが、PCR検査は限られた病院でしか受けることができず、現地住民に対する隔離施設の準備もありません。

支援しているカンボジア農村は毎年水没する地域的な特徴から清潔な水の確保が困難で、トイレや手洗いなどの予防医学的知識の普及も不十分でした。そのため公衆衛生上の問題点が多々あり、感染症が多い地域だったため、現地団体が重点的に衛生学的知識の普及活動を行っている最中でした。

医療制度が脆弱なカンボジアのような国で、もし対象地域の農村でコロナウイルスに村人が感染したら、おそらく病院へ行くことも叶わないでしょう。現地NGOであるKCDは、コロナ対策としてまず地元自治体と協力して、ウイルスの知識や感染予防の方法などを村々を回って伝える活動から始めました。また流通がストップしたため、安全な野菜を自給するために家庭菜園を作ることを奨励し、野菜の種子や苗を配布しました。

1. 子ども会ピース・クラブの活動

クメール人とベトナム人が混在するプレックチュレイ行政区とその周辺村で活動が始まりました。子どもたちが民族を越えて共生するために子ども会を作り、全国ネットワークである青少年クラブにも参加し、様々な交流と自分たちのコミュニティのためのボランティア活動を行っています。自分たちで自分たちのコミュニティの問題を分析し、その解決方法を考えてきました。これまでデング熱撲滅キャン

ペーン、就学前の子どもがいる家を回って就学の重要性や学校の楽しさを伝える家庭訪問、多くの青少年が関心を持つ問題（早期結婚・妊娠、家庭内暴力など）を解決するために作った啓発ビデオ、ドラッグ問題解決のためのロールプレイによるアドボカシー活動など、ピース・クラブは KCD スタッフの助言を得ながら、自分たちが住むコミュニティや家庭をよくしようと積極的に行動してきました。

その重要な活動の一つが、村全体の就学率を上げるために、中高生が簡単なクメール語、英語、算数などを低学年および就学前の子どもに教える「小さな先生」となる青空教室です。その結果、プレックチュレイから高校に進学した子ども全員が大学にまで行くようになり、保護者たちも子どもの教育に重きを置くようになってきました。

しかし 2 月頃から始まったコロナ拡散防止のため、3 月から学校は休みになり、オンライン授業は家庭のネット環境の都合で受けることができない生徒がでるなど、子どもの学ぶ機会が奪われることになりました。「小さな先生」たちは、自らの学業に加えて、年少の子どもたちのためにも十分な社会的距離をとりつつ、補習授業を行っています。

また公衆衛生的知識の普及が遅れる地域であるため、急遽、副郡長（女性・子供の権利担当）ら行政役人と協力して KCD スタッフとともにピース・クラブのメンバーも、コロナ感染の予防方法（手洗い、うがいなど）を村々を回って伝えました。

2. 有機農業推進事業

2019 年度は、8 月にプレックチュレイの有機農業実践者が 2 人と副郡長 1 人、KCD スタッフ 2 人が、来タイし、タイの有機農業生産物販売グループや市場などを訪問しました。帰国後、自分のコミュニティ内でも帰国報告会を開き、経験の共有をすると、多くの農民が関心を示しました。屋敷地が狭い傾向にある村が多いのですが、家族で消費するために家庭菜園を始める人が増えました。特に 2 月以降、コロナの脅威のため、物流が滞るようになり、ベトナム側の市場に行くこともできなくなりました。そこでスタッフが野菜などの種子を配布し、より一層多くの人が家庭菜園を持つようになりました。

【成果と課題】

ベトナム国境の村プレックチュレイから始まった活動ですが、2018 年から周辺地域へと活動が広がりました。その重要な担い手となっているのが、プレックチュレイ出身者の青少年たちです。現在のピース・クラブのメンバー（中心は中学生）だけでなく、プノンペンの大学に通っている、またはすでに卒業した者たちが、ピース・クラブの若いメンバーの相談役としてピア・サポートしています。小さな子どもたちにとっては、身近な手本であり、進学に対する不安を解消してくれるだけでなく、家族の問題や経済的な困難などの経験もシェアできる存在です。プレックチュレイからピース・クラブのメンバーと KCD ス

タッフたちは周辺村へも足を運び、スポーツ交流、図書室の整備、新しいクラブの設立などを一緒になって実施しました。他の村でできたピース・クラブとの交流も始まり、地域内でのネットワークもできようとしています。しかし多くの地域で多くの活動が始まったため、プレックチュレイのピース・クラブのメンバーも忙しくなり、「小さな先生」ボランティアの数が減少しているのが現実です。学業とボランティアの両立が今後の課題といえます。

有機農業推進事業については、依然生産が需要に追いついていません。国全体での有機農業生産物を流通・販売する取り組みがあればいいのですが、行政に積極的な支援政策があるわけではなく、今後も安全な食を確保する有機農業の普及を進めていきます。また同時に、農業外収入に期待する村人は多いため、自然を利用した草木染、お菓子や干し魚などの加工品作りなどの研修への要望があり、タイとの有機農業農民交流の継続が望まれています。

しかし 3 月以降、様々な活動がコロナウイルスのために中止や変更を余儀なくされています。村落周辺で感染者は報告されていませんが、世界中で多くの人々が亡くなるニュースを聞いて村人たちはコロナウイルスを非常に恐れています。まずは正しい知識と予防方法を伝えることが重要であり、青少年を感染の危険から守ることはコミュニティの将来につながります。今後、KCD とウェブ上での話し合いを進め、中長期計画を考えたいと思います。

1－2. 国内支援事業「宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業」

『東日本大震災で甚大な被害を被った宮城県において、各地域の福祉力・防災力を高めるとともに、普段から、住民一人ひとりの命と暮らしを守ることを目指す。』

このことを実現するために、くらしの学びサポートオフィス HumanBeing は 2019 年度、宮城県内で取り組まれる児童・学生・青年層が主体的に参画する福祉・防災学習の実施について、10 歳の子どもが成人する期間をイメージして、10 年スパンの学習ビジョンを持ちながら、福祉・防災学習を実施・検討・計画されている地元の社会福祉協議会、NPO、学校等とご相談しながら、次のようなことに取り組みました。

特に今年度においては、東日本大震災の経験を教訓としてつないでいく防災ゲームの新規開発、2018 年度に開発した「ぼうさいグッズ手作りキット」の普及啓発、中長期的な福祉学習推進事業を中心とした実践支援などを通じて、様々な学習者が主体的に福祉・防災学習に取り組める教材づくりや、福祉・防災学習推進の基盤づくりを目指しました。

1、福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発事業

- 東日本大震災の経験を教訓としてつないでいく防災ゲームの新規開発

東日本大震災から 10 年の 2021 年完成を目指し、震災の風化が進む中、震災発生直後から県内各地でおこった助け合い活動を「あのときはよかった」で終わらせず今後に教訓としてつなげていく

防災ゲームを作成します。

2018 年度に県内外の学生・若者・親子・防災専門家とともにプロジェクトチームを立ち上げ、今年度は６回の企画会議を開催しました（実施日…7/28、8/25、9/15、12/8、1/19、2/15）。既存の防災ゲームの体験と感想・アイディアの共有をしたり、東日本大震災や令和元年東日本台風の際の困りごとなどを出し合い、ゲームの素案づくりに取り組みました。

２、「ぼうさいグッズ手作りキット」普及啓発事業

2018 年度に開発した「ぼうさいグッズ手作りキット」（ぼうさいポーチ・ぼうさいパラコードブレスレット）の周知活動や、キットを活用した防災力を高める学びの場づくりに取り組みました。

- 「第３回地域支え合いセンター担い手養成研修」
  主催：愛媛県社会福祉協議会
  日時：2019/7/18 13:00～16:00
  会場：八幡浜市保健福祉総合センター
  参加者：県内地域支え合いセンター職員 30 人
  内容：メンタルヘルス講座、ぼうさいグッズ手作りキットの紹介と体験

- 「I Do Café　Vol.16　遊んで作って、まなぼうさい（防災）！」
  主催：一般社団法人コミュニティ・４・チルドレン
  日時：2019/7/20 13:30～16:30
  会場：大阪社会福祉指導センター（大阪府）
  内容：防災ゲームとぼうさいグッズ手作りキットの紹介・体験（ぼうさいパラコードブレスレット）

- 「夏休み！防災について学ぼう！！」
  主催：色麻町社会福祉協議会
  協力：宮城県加美農業高校
  日時：2019/7/31
  会場：色麻町保健福祉センター
  参加者：小学生 15 人
  内容：防災クッキング、ぼうさいグッズ手作りキットの体験（ぼうさいポーチ）

- 「防災力向上セミナー」
  主催：NPO 法人ぱんぷきんふれあい会
  日時：2019/9/18、10/2 10:00～11:30
  会場：吉野町復興住宅集会所（石巻市）
  参加者：延べ 50 人
  内容：津波避難タワーへの避難体験、ぼうさいグッズ手作りキットの体験（ぼうさいポーチ）

● 「JCB 社会貢献プログラム　東日本大震災支援　ぼうさいポーチづくり」

主催：株式会社ジェーシービー

日時：2020/1/22 13:30～16:00

会場：JCB 青山本社（東京都）

参加者：9 人

内容：東日本大震災の被災地へ送るぼうさいポーチの作成

３、福祉・防災学習実践支援事業

県内で実施される福祉・防災学習事業について、6 つの地域で 7 件の実践支援に取り組みました。

● 地域指定福祉教育推進事業

主催：岩沼市社会福祉協議会（宮城県社会福祉協議会による指定事業）

「学校と地域をつなぎ、地域全体で福祉学習を推進する」ことをテーマに、どのような取り組みが必要かを岩沼市社協・宮城県社協と話し合い、まずは様々な層にアプローチしていこうと研修会や情報交換会に取り組みました。(HumanBeing はアドバイザーを担当)

2019/6/7	福祉教育実践研究会・発表会
2019/6/19	担当者打ち合わせ
2019/8/21	担当者打ち合わせ
2019/9/4	担当者打ち合わせ
2019/10/9	玉浦中学校での福祉の授業実施
2019/10/31	福祉教育担当者情報交換会
2020/2/27	今年度の振り返り

● おおさき福祉学習推進事業（2016 年度～継続事業）

主催：大崎市社会福祉協議会

地域共生社会の実現に向けた、地域福祉推進の人材育成を目的とした福祉学習事業を実施。2019 年度は本所・7 支所の福祉学習担当職員とともに、2 支所の担当職員が講師役を務めた模擬事業と、大崎社協がすすめる福祉学習のイメージを固めていくためのグループワークを実施しました。(HumanBeing はアドバイザーを担当)

2019/6/13	第 2 回検討会に向けた担当者打ち合わせ
2019/7/9	第 2 回検討会に向けた担当者打ち合わせ
2019/7/22	2019 年度第 2 回検討会
2019/8/2	第 3 回検討会に向けた担当者打ち合わせ
2019/9/3	第 3 回検討会に向けた担当者打ち合わせ
2019/9/17	2019 年度第 3 回検討会
2019/12/4	第 4 回検討会に向けた担当者打ち合わせ
2020/1/8-9	第 4 回検討会に向けた担当者打ち合わせ

2020/1/20	2019 年度第 4 回検討会
2020/2/3	第 5 回検討会に向けた担当者打ち合わせ
2020/2/26	2019 年度第 5 回検討会
2020/3/9	2020 年度に向けた担当者打ち合わせ
2020/4/7	2020 年度計画について担当者打ち合わせ
2020/5/19	2020 年度第 1 回検討会

● 高校生・大学生のボランティア場づくり事業（2016 年度～継続事業）

主催：仙台市社会福祉協議会若林区事務所

協力：一般社団法人 ReRoots、東北学院大学災害ボランティアステーション、東北大学ボランティアサークルたなぼた、宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!

区内で復興支援活動や地域防災活動に取り組む大学生ボランティア団体と高校生がともにボランティア活動に取り組む場を創ることで、ボランティア活動の促進や高校生が将来のキャリアについて考える機会とするとともに、区内で活動するボランティア団体や地域団体の輪を広げることを目的として 2016 年度から始まった事業です。2019 年度は 4 団体と連携し事業を展開しました。（HumanBeing は全体コーディネートを担当）

2019/6/25	第 2 回高校生向け説明会
2019/9/2	担当者打ち合わせ
2019/10/5	宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!活動日（南小泉南赤十字奉仕団・防災クッキング）
2020/1/28	高校生・協力団体アンケートについて担当者打ち合わせ
2020/3/10	今年度の振り返り

● 2019/6/7　丸森町ボランティア連絡会研修会「作ってまなぼうさい」

主催：丸森町ボランティア連絡会

会場：丸森まちづくりセンター

内容：講話・防災グッズ手作り体験

● 2019/6/10　宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!研修会

主催：宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!

会場：宮城学院女子大学（仙台市）

内容：災害・防災について、食と防災の取り組み事例の紹介

● 2019/8/6　「防災クッキング体験をしてみよう！」

主催：大和町社会福祉協議会

会場：ひだまりの丘

参加者：小学生 12 人・保護者 3 人
内容：防災クッキング、防災グッズ手作り体験

- 2019/6/14、2020/2/27　「防災教室」
  主催：丸森町立筆甫小学校
  参加者：全校生徒
  内容：防災カルタ、防災クッキング

４、福祉・防災学習推進のためのネットワーク構築事業

県内の関係機関と情報交換・相談対応等を行い、福祉・防災学習にかかわる情報収集・提供、ネットワーク構築に取り組みました。

５、普及啓発のための情報発信事業

宮城での実践を活かし、県外でのアドバイザー業務や、研修会の開催に協力しました。

・2019/7/16 宇和島市社会福祉協議会内部研修（愛媛県）
・2019/9/27-28 青森県社会福祉協議会・中泊町社会福祉協議会・田舎館村社会福祉協議会「地域における福祉学習実践事業」
・2019/10/1 青森県「自主防災組織リーダー研修会」

【成果と課題】

- 福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発事業
  防災ゲーム開発にあたり、令和元年東日本台風や新型コロナウイルスの影響で開催を見送った時期もありましたが、６回の企画会議を開催しました。2021 年・東日本大震災から 10 年の節目を目指し、開発を続けていきます。
- 「ぼうさいグッズ手作りキット」普及啓発事業
  県内外５か所で実施しました。キットづくりを体験した方々からは「ぼうさいポーチを作りながら何を入れようか自然と考えることができた」「好きな色の組み合わせで作れて愛着がわいた」といった声をいただきました。ご自身のためだけでなく、東日本大震災で被災された方々のためにぼうさいポーチを作り寄贈してくださった県外の企業もいらっしゃり、ぼうさいポーチ作りを通して、東日本大震災からの復興状況について県外の方にお伝えする機会をつくることができました。
- 福祉・防災学習実践支援事業
  6 つの地域で 7 件の実践支援に取り組みました。東日本大震災からの復興に取り組む支援団体と連携した担い手育成や、地域共生社会の実現をめざした地域全体の福祉力を高めていくための福祉学習の推進のサポートや、東日本大震災以降発生した平成 27 年 9 月関東・東北豪雨や令和元年東日本台風の被災地における防災学習実践支援などに取り組みました。
  特に防災学習実践支援の場では、県内では東日本大震災以降何度も台風災害による被害が発生しているため、防災について繰り返し学んでいくことが大事だという声を主催者・参加者からいただきました。

東日本大震災から10年目に入りました。沿岸部での復旧工事や、復興に向けた支援活動や地域づくり活動は未だ続いているものの、時間の経過、県外からの転入、これまで復興を目指し支援活動や地域づくりを担ってきた方々の高齢化や県外への転出に伴って、記憶を教訓としてどのように新しい方々や次世代を担う若者につないでいくかが懸念されます。また、平成27年9月関東・東北豪雨や令和元年東日本台風など、地震以外の災害による被害も東日本大震災後相次いでいます。

新型コロナウイルスの影響で人が集まる場を開きづらく、先が見えづらい状況ではありますが、現在作成中の防災ゲームや2018年度に作成したぼうさいグッズ手作りキットのように、今後も県内各地の実践者のニーズを聞きながら、学習者に合った身近で取り組みやすい防災学習ツールを展開していき、防災の意識・実践力の向上や、担い手育成に取り組んでいきたいと考えています。

2. 文化交流活動支援事業

2－1. スタディツアー

◆タイ・スタディツアー（タイ事業体験プログラム）

8月8-12日＠タイ国コンケン県ムアン郡サワティー行政区ノーンメック村

参加者：6人（留学生含む）+C4Cスタッフ3人

日本の仙台と関西からだけでなく、現地コンケン大学日本人留学生2人、10日からはカンボジア人5人が加わり、国際色豊かな交流になりました。11 日に行われた田植えには多くの村人が参加し（総勢約60人）、用意した苗はあっという間に植え終わってしまいました。これまで以上に多くの村人が『結』で行う有機農業に関心を持ってくれました。経験交流会では、日本から参加した社協職員の一人が、自分が働いている地域の環境と仕事について報告をし、有意義な時間を持つことができました。

◆カンボジア農村ワークキャンプ「村の小学校の図書館をみんなで整備しよう」

2月7-11日（現地プノンペン集合・解散）＠カンボジア国カンダール県コントム郡コンポンコン行政区レヴィートーン村小学校

参加者10人＋C4Cスタッフ3人

C4Cが初めて主催したカンボジア農村ワークキャンプでした。日本は仙台から沖縄まで、タイはコンケンからも、年齢は高校生からシニアまでの多様な日本人が参加しました。プノンペンで初めて全員が顔を合わせましたが、現地に行く前から図書室をどのように飾ったらいいかとLineで話し合い、持ち物などを確認していたため、村の

小学校に行って現状を見てから話し合って決めた作業の分担もスムーズに進み、全員が積極的に参加しました。途中、子ども会メンバーとの楽しい交流会もありました。偶然、村の寺院で、大切な仏教行事である万仏祭にも参加することができました。ちょうど新型コロナウイルス感染が話題になり始めた頃だったため、村人たちは初めて迎えた外国人に戸惑いながらも、慎重に歓迎してくれました。最後には、KCD事務所で振り返りを行い、様々な気づきと感動をシェアしました。

2－2. チャリティ・ラン応援事業（フィリピン・しょうがい児・者自立生活支援事業）

JPCom-CARES が主催する第 3 回チャリティ・ラン「Run for Amity 2020（友好ラン）」を 2020 年 3 月 8 日(日)に開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、2 度の延期・日程調整を試みましたが、収束の見通しが立たず「中止」を決定しました。

今年度も日本から本取り組みを応援するため、①ギフト付き寄付サポーター、②子どもたちの参加を応援するスポンサーを募るファンドレイジング活動を行い、のべ 27 人の方にご支援をいただきました。中止にともない、お預かりしている寄付について支援者の方々に確認させていただき、JPCom-CARES への直接寄付、または次回チャリティ・ランへの預託という形で賛同していただきました。そして総寄付額より必要経費を差し引いた、64,005 円を現地団体へ寄付しました。次年度は、皆の笑顔が集うチャリティ・ランの開催を実現したいと考えています。

【収入】			
①ギフト付き寄付サポーター			
寄付コース	申込額	寄付者数	計
てくてくコース	3,000 円	5 人	15,000 円
ルンルンコース	5,000 円	12 人	60,000 円
ランランコース	10,000 円	1 人	10,000 円
合計		18 人	85,000 円（A）
②子どもたちの参加を応援するスポンサー			
申込額（一口）	総口数	寄付者数	計
1,000 円	39 口	9 人・団体	39,000 円
＊内 5,000 円(5 口)は、次回開催まで C4C で預託			-5,000 円
合計			34,000 円（B）

【支出】	
ギフト代	29,701 円
送料・手数料・包装代	9,384 円
広告費（チラシ代・郵送代）	15,910 円
合計	54,995 円（C）

【現地団体 JPCom-CARES への寄付額】	
収入（A＋B）－ 支出（C）	64,005 円

3. 視察・研修・ワークショップ事業

3－1. 研修事業

1. タイにおけるカンボジア人有機農業研修

日時： 8 月 10-15 日　＠タイ国コンケン県ノーンメック村とその周辺
参加者：カンボジア人農民 2 人、副郡長（女性と子ども担当）1 人、KCD スタッフ 2 人の計 5 人

カンボジア人農民をタイに受け入れて行う有機農業研修は、今回で 4 回目を迎えました。ノーンメック村での田植えを通した国際交流から始まり、カラシン県の有機農場や市場など 4 か所を訪問し、有機農業を主体とした多角経営、地元自治体で推進している無農薬推進活動、食品加工、無農薬食物だけを扱う病院内のマーケットとその運営、農業を選択した若者たち、藍染め・手織りなど様々なテーマをタイ人農民の経験から学ぶことができました。カンボジア人農民にとって、高学歴のタイ人が農業を選択することは非常に珍しいことで、とても感銘を受けていました。

そして振り返りでは、自分の田畑で完全な無農薬にすることはまだできないが、これからもタイで学んだことを応用していきたいと述べていました。彼らが特に関心を持ったことは、草木染や藍染めでした。染めならば乾季にでき、野菜のような生ものではないので、一定量ができるまでストックしておくことができます。T シャツに染めればプノンペンの市場でも販売できるでしょう。タイ人との話し合いの結果、2020 年度、できればカンボジア人がタイで有機農業や草木染の研修をした後、タイ人スタッフと講師がカンボジアに行き、身近で使える草木染の材料を探し、一緒に現地に合わせた草木染のやり方を模索するというタイとカンボジアの 2 か所での研修ワークショップ開催案が出ました。今後、可能性を検討します。

3―2.　国内 IDoCafé（あい・どぅ・かふぇ）事業

◆IDoCafé　Vol.16　「遊んで作って、まなぼうさい（防災）！」
7 月 20 日　＠大阪社会福祉指導センター研修室①　参加者 21 人

災害から命と暮らしを守るための備えを、普段から身近に具体的に学んでいくためのツールを紹介していただきました。京都府長岡京市のフセマルプラットフォームの田川雅規さんと東直美さんからは、これまでの実践の経緯と、自ら開発した子どもから大人まで楽しみながら取り組める防災ボードゲーム「クツはいた！！」を紹介してもらい、みんなで楽しみながら体験しました。宮城県の Human Being の菅原清香さんからは防災グッズ手作りキットを紹介してもらい、一緒にパラコードブレスレットを作成しました。実際に体験してみると、皆さんの集中力が高まったのがわかり、とても密度の濃い時間を過ごすことができました。

4. パートナーシップ推進事業

4－1. 調査事業

（1）宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業のための調査
調査実施者：Human Being　菅原清香会員
　宮城県および周辺県等において、国内事業「福祉・防災学習推進事業」の実施主体を訪問し、ヒアリング調査、研究、事業実施に関する意見交換を行いました。C4C の各事業と当事業との調整も行いました。

5. 情報提供事業

5－1. ホームページ、Facebook、C4C だよりによる情報発信

　昨年度の総会にて会員の方から出された意見やアイデアを踏まえ、今年度より、支援者の方々に各国事業のホットなニュースを届けるニュースレター「C4C だより」を年 3 回発行しました。そして郵送・ホームページにて公開し、情報発信に努めました。

5－2. イベント参加

◆ワン・ワールド・フェスティバル　for Youth
日時：12 月 15 日 10：00-16：00　@大阪 YMCA
　毎年行われる、高校生のための国際交流の祭りに C4C として活動紹介ブースを出展しました。
◆ワン・ワールド・フェスティバル
日時：2 月 1-2 日 10：00-17：00　@関テレ扇町スクエア、北区民センター
　毎年行われる世界につながる国際協力の祭りに C4C として活動紹介ブースを出展し、フィリピンのしょうがい児・者のためのチャリティ・ランを紹介し、保護者たちが作った手作りアクセサリーなどの販売をしました。

6. 組織運営

◆2019 年度会員について

2019 年度会員・寄付者　人数の変動

		2017 年度	2018 年度	2019 年度
正会員数	個人	18	13	15
	団体	2	2	0
賛助会員数	個人	22	23	23
	団体	1	0	1
使途指定寄付	宮城	1	1	1
	フィリピン・奨学金	3	1	1
	フィリピン・ラン	26	18	18
	フィリピン・ラン・スポンサー		7	8
一般寄付		5	8	7

総会員人数は、2018 年正会員・賛助会員（個人・団体）合わせて、38 人だったものが、2019 年は同数の 39 人でした。それほど増員できなかった理由には、コロナ拡大によりフィリピンへのスタディツアーが中止になったこと、新しい会員を開拓する機会が不足したことなどがあげられます。しかしギフト付き寄付やスポンサー寄付をくださった方々は、フィリピンでのチャリティ・ランが中止になったにも関わらず、その寄付を将来の事業に充ててくださいました。こういったお気持ちのある方々を会員へと導けるように、より一層魅力ある発信をしていかなければならないと考えています。

2019年度　　貸借対照表　（2020年5月31日現在）

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン　　本来事業の会計

（円）

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
現金	43,587	未払金	108,519
普通預金	118,673	前受金	15,000
流動資産合計	162,260	預り金	1,665
固定資産		流動負債合計	125,184
什器備品	66,231	固定負債	
固定資産合計	66,231	固定負債合計	0
		負債合計	125,184
		正味財産の部	
		前期繰越正味財産	335,985
		当期正味財産増減額	-232,678
		正味財産合計	103,307
資産合計	228,491	負債及び正味財産合計	228,491

2019年度　　財産目録（2020年5月31日現在）

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン 本来事業の会計

（円）

科　目	摘　要	金　額		
資産の部				
流動資産				
現金		43,587		
普通預金		118,673		
--ゆうちょ銀行総合口座		113,673		
--ゆうちょ銀行振替口座		5,000		
流動資産合計			162,260	
固定資産				
什器備品		66,231		
固定資産合計			66,231	
資産合計				228,491
負債の部				
流動負債				
未払金		108,519		
前受金		15,000		
預り金		1,665		
流動負債合計			125,184	
固定負債				
固定負債合計			0	
負債合計				125,184
正味財産合計				103,307

2019年度　損益計算書（予算対比）

2019年06月01日～2020年05月31日(配賦)

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン　本来事業の会計

（収入の部）　（円）

	科目	予算額	決算額	予算残額
1.　会費収入				
	正会員受取会費	300,000	150,000	150,000
	賛助会員受取会費	300,000	135,000	165,000
2. 寄付金				
	一般寄付	12,000,000	13,123,840	-1,123,840
	フィリピンのしょうがい児者応援寄付	0	119,000	-119,000
	使途指定寄付	0	623,940	-623,940
3. 事業収入				
	タイ・スタディツアー事業収入	600,000	140,000	460,000
	フィリピン・スタディツアー事業収入	700,000	0	700,000
	カンボジア・スタディツアー事業収入	0	300,000	-300,000
	国内IDoCafe事業収入	0	9,600	-9,600
4. 民間助成金		1,000,000	0	1,000,000
5. 雑収益				
	受取利息	0	30	-30
当期収入合計（A）		14,900,000	14,601,410	298,590

（支出の部）

科目		予算額	決算額	予算残額
1.　事業費				
■ＮＧＯ支援事業				
海外支援事業費				
	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ・JPCom-CARES 支援	4,670,836	4,701,596	- 30,760
	タイ農村コミュニティ支援	2,090,500	2,090,499	1
	調整にかかる海外渡航費等	500,000	801,692	- 301,692
事業助成事業費				
	カンボジア KCD 支援	2,000,000	1,996,380	3,620
	調整にかかる海外渡航費等	200,000	15,000	185,000
日本支援事業				
	宮城県における福祉・防災学習推進事業	700,000	644,888	185,000
	■NGO 支援事業費計	10,161,336	10,250,055	−88,719
■文化活動支援事業				
	タイ・スタディツアー事業費	400,000	197,892	202,108
	カンボジア・スタディツアー事業費	0	431,342	−431,342
	フィリピン・しょうがい児・者自立生活プログラム事業費（チャリティラン応援事業）	700,000	54,995	645,005
	国際交流事業費	0	14,713	−14,713
	■文化活動支援事業計	1,100,000	698,942	401,058
■視察・研修・ワークショップ				
国内 IDoCafe 事業費		30,000	18,170	11,830
招聘視察・研修事業費		400,000	503,828	−103,828
	■視察・研修・ワークショップ計	430,000	521,998	−91,998
■パートナーシップ推進事業				
調査事業費		2,800,000	2,479,390	320,610
	■パートナーシップ推進事業計	2,800,000	2,479,390	320,610
■情報提供事業				
情報提供事業費		30,000	41,000	−11,000
	■情報提供事業費計	30,000	41,000	−11,000
事業費支出計		14,521,336	13,991,385	529,951

（支出の部）

科目		予算額	決算額	予算残額
管理費				
	給料手当	650,000	312,800	337,200
	旅費交通費	50,000	22,800	27,200
	諸謝金	0	10,000	-10,000
	会議費	10,000	23,000	-13,000
	通信運搬費	30,000	33,280	-3,280
	消耗品費	90,000	47,583	42,417
	印刷製本費	30,000	31,752	-1,752
	保険料	60,000	65,380	-5,380
	支払地代家賃	120,000	120,000	0
	諸会費	15,000	25,000	-10,000
	支払手数料	20,000	24,278	-4,278
	租税公課	2,000	10,600	-8,600
	減価償却費	0	66,230	-66,230
	法人税、住民税及び事業税	70,000	50,000	20,000
管理費支出計		1,147,000	842,703	304,297
当期支出費用合計 (B)		15,668,336	14,834,088	834,248
当期収支差額 (A)-(B)			-232,678	
前期繰越金 (C)			335,985	
次期繰越金 (A)—(B)+(C)			103,307	

2020年度　コミュニティ・４・チルドレン(C4C)　事業計画書
Community 4 Children
2020年6月1日～2021年5月31日まで

新型コロナウイルスによる影響と各地域の対応を見ながら、フィリピン国、タイ国、カンボジア国において現地の連携団体と協力しながら運営と活動を支援するとともに、宮城県における福祉・防災学習を地域に根差した学びとなるように推進し、その基盤づくりを継続します。2020 年度は、まだコロナの影響下にあると考えられるため、それぞれの地域での活動の充実を図り、また SNS やウェブ会議ツールを通じて、連携団体や関連する団体との相互交流を活発に行い、新しい事業に挑戦していきます。

アジアの子どもたちを継続的に支援するために、上記の活動を支える基盤となる会員や寄付者を募り、団体運営充実に力を注ぎます。

1. NGO 支援事業

1－1. 海外支援事業

フィリピン国 JPCom-CARES への支援は継続します。タイでは、ノーンメック村コミュニティ支援事業として支援します。各地の現地の団体が主体的に助成金等の多彩な財源を獲得できるよう、C4C からもアドバイスを行います。

未だコロナ禍が終息に至らないため、コロナウイルス感染症拡散の状況と政府の対応に目を離すことができません。

A. JPCom-CARES(フィリピン共和国バギオ市、ハッピー・ハロー村、ベンゲット州カバヤン町)

これまでリハビリテーションセンターSTAC5 を拠点として療育支援を実施してきましたが、今年度より、各家庭や地域に出向く訪問型リハビリテーションの提供も行っていきます。支援者・関係者を対象とした研修・セミナーを実施し、地域内での互助や活動の輪が広がっていくように働きかけていきます。積極的に地域にアウトリーチすることにより、しょうがいのある子どもたちが尊厳を持って自立した生活を送っていけるような地域の基盤づくりを促進していきます。また、新型コロナウイルス感染症による影響で、経済的に厳しい状況にある家庭を対象に、生計向上プロジェクト研修セミナーの開催や必要な財源の支給を行い、子どもたちもご家族も安心して生活できるよう支援します。今年度も引き続き、チャリティ・ラン、チャリティ・ズンバ、募金箱の設置等を通じて、自主財源の確保を目指してファンドレイジングを行います。

B. タイ・ノーンメック村コミュニティ支援（タイ王国コンケン県）

ノーンメック村事業では、村人でもあるローカルスタッフを中心に、有機農業と植林、収入向上事業を継続していきます。特に村の青少年の就労支援として、これまで研修してきた草木染の商品開発を日本

から応援します。恒常的な副収入が獲得できるようなグループ作りや広報などを支援します。

これまで以上に村の子どもたちをコミュニティ活動に誘うため、稲作や公共地の植林活動における『結』による村の絆強化の他、子どもたちとともに行う種苗づくりを通じた支援を行います。

タイでは、農村コミュニティを事業対象地にしているため、コロナの影響は最小限に留まっています。逆に、コロナのために有機農業を始めたい人が増えました。今後、活動の協力者が増えると期待されます。

C. 海外プロジェクト助成（短期の事業単位での助成）

Khmer Community Development(KCD)－カンボジア国カンダール州プレックチュレイ地区の子ども会活動の支援を継続して行います。カンボジアでは、全国一斉休校やオンライン授業のため、農村の子どもたちの学業の遅れが危ぶまれており、現地ボランティアとともにネットを通じた教育支援を検討し、可能な限り実施していきます。また状況に応じて可能ならば、コミュニティにおける有機農業を普及させるために、カンボジア人のタイにおける有機農業研修を昨年に引き続き実施します。

その他、ヒアリングや現状把握を行い、現地団体と寄り添いながら事業を進め、支援要請があった場合に、別に定める助成要綱に沿ってその都度検討します。

1－2. 国内支援事業

A. 宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業

東日本大震災の経験を教訓として今後につないでいくための防災ゲームの開発、社会福祉協議会職員のための福祉防災学習実践ハンドブックの作成、県内で取り組まれる福祉・防災学習実践支援などを通じて、東日本大震災から10年という節目に向けた震災の教訓を伝える防災学習ツールの開発や、福祉・防災学習推進の担い手育成・基盤づくりを目指します。

B. 国内プロジェクト助成

日本国内で子どもたちを中心とした地域づくり等を行っている団体のヒアリング調査・視察を実施し、対象事業を検討し、支援要請があった場合に、別に定める助成要項に沿ってその都度検討します。

2. 文化交流活動支援事業

タイ、フィリピン、カンボジア、日本など複数の国で支援活動を行い、異なる国の間でスタディツアーや研修交流を行ってきました。しかしコロナ禍によって国境を越える交流は今しばらくできなくなりました。パンデミックであるため、自国に感染者がいなくても、おそらく２０２０年の冬になるまで、様子見ということになるでしょう。

2－1. スタディツアー

A. タイ・スタディツアーの実施

コロナの影響で開催の予定はありません。オンライン・スタディツアーを検討中です。

B. フィリピン・スタディツアーの実施

JPCom-CARES との共同開催（3 月開催予定）－新型コロナウイルス感染症および入国状況を考慮し検討します。

C. カンボジア・スタディツアーの実施

KCD との共同開催（２月頃）－コロナの状況を見て、カンボジアでのツアーを検討します。

2－2. 国際交流事業

2020 年 9 月に、食に焦点を当てた Food Camp を「第二回青少年国際キャンプ」としてカンボジアで開催する予定でしたが、開催は 2021 年度に延期します。

3. 視察・研修・ワークショップ事業

3－1. 視察・研修事業

理事、社員、寄付者、専門家を中心とした現地視察、連携団体に所属するスタッフ、利用者への研修、および連携団体間の交流を実施します。

- 日本、タイ、フィリピンをはじめラオス、カンボジアなどのアジア諸国で、C4C と関連する活動を行う団体、個人との相互交流を図ります。
- 日本国内での現地報告会、講座や演習の開催、講師派遣
- 子どもを中心にした地域づくり推進を目的とした講座や演習の実施、もしくは講師およびアドバイザーの派遣

タイとカンボジア（プレックチュレイ）における有機農業研修を計画しています。しかし、コロナの状況によって中止もしくは実施を検討します。

3－2. 国内 IDoCafe 事業（年 2 回開催予定）

IDoCafe は、何らかの想いを形にし、社会に貢献しようと考える人々が、ディスカッションを通じて新しいつながりを生み出す場です。国内での情報発信のためにも、コロナの状況を見ながら積極的に開催するよう努めます。

4. パートナーシップ推進事業

4－1. 調査事業

- 日本、タイ、フィリピンをはじめ、ラオス、カンボジアなどのアジア諸国で、子どもたちを中心とした地域づくり等を行っている団体のヒアリング調査・視察を実施し、対象事業を検討し、パートナーづくりを進めます。
- 昨年度に引き続き、アジアや日本で活動する団体へ調査員を派遣すると同時に、これまで出会った団体との交流を深め、現場の状況やニーズから支援のやり方やあり方の相互理解を進めます。

・ 宮城県における福祉・防災学習推進事業を推進するための調査研究・調整を年間委託して行います。

4－2. ホームページやブログなどを通じて、C4C の取り組みを発信しパートナーづくりを進めます。

5. 情報提供事業

5－1. ホームページ、Facebook、C4C だよりによる情報発信

ホームページや Facebook の更新、C4C だよりの発行を通して、C4C の取り組みを発信していきます。

5－2. イベント参加

ワン・ワールド・フェスティバル等、国際協力や地域づくりに関連する様々なイベントに参加し、C4C の活動を紹介します。

5－3. 支援キャンペーン

支援団体や支援事業への寄付や参加を呼びかけるキャンペーンを実施します。

JPCom-CARES が 2021 年 3 月に開催予定のフィリピン・チャリティ・ラン及び自主財源確保のために応援キャンペーンを行います。新たにクラウドファンディングの仕組みも活用します。

5－4. 現地提携団体への情報提供

世界の動向をはじめ、活動をサポートする情報を提供します。

6. その他

上記の他、C4C の目的を達成するために必要な事業を実施していきます。

2020 年度　一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン事業収支予算書 2020年6月1日～2021年5月31日			
		金　額（円）	備考
（収入の部）			
1. 会費収入			
	正会員会費	300,000	
	賛助会員会費	300,000	
2. 寄付金収入		12,000,000	
3. 事業収入			
	フィリピンスタディツアー事業収入	400,000	
	タイスタディツアー事業収入	0	
4. 民間助成金		1,000,000	
当期収入合計（A）		14,000,000	
（支出の部）			
1．事業費			
■ＮＧＯ支援			
海外支援事業費		（JICA精算レート2020年7月に準ずる）	
	タイ・農村コミュニティ支援	2,126,314	610,773タイ・バーツ
	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ・JPCom-CARES支援	4,848,614	2,247,590.34ペソ
	調整にかかる海外渡航費等	200,000	
事業助成事業費			
	海外プロジェクト助成	2,000,000	カンボジアKCD支援$18000
	調整にかかる海外渡航費等	200,000	
日本支援事業費			
	宮城県における福祉・防災学習推進事業	700,000	
■文化交流活動支援事業			
	フィリピンスタディツアー事業費	400,000	
	タイスタディツアー事業費	0	
	国際交流事業費	0	
■視察・研修・ワークショップ			
	国内IDocafe事業費	30,000	
	招聘視察・研修事業費	400,000	カンボジア農民有機農業研修
■パートナーシップ推進事業			
	調査事業費	2,800,000	調査研究業務委託費240万円（宮城県）含む
■情報提供事業			
	情報提供事業費	30,000	HP管理、イベント参加料等
	事業費計	13,734,928	
2. 管理費			
	給料手当	650,000	事務パート1名
	旅費交通費	50,000	
	会議費	10,000	
	通信運搬費	30,000	
	消耗品費	90,000	
	印刷製本	30,000	
	保険料	60,000	
	支払地代家賃	120,000	
	諸会費	15,000	
	支払手数料	20,000	
	租税公課	2,000	
	法人税、住民税及び事業税	70,000	
	管理費計	1,147,000	
当期支出合計（B）		14,881,928	
当期収支差額（A）-（B）		-881,928	
前期繰越金（C）		335,985	
次期繰越金（A）-(B) ＋（C）		-545,943	